

カブルより中亜横断莫斯科へ出づる記

田鍋安之助

「続対支回顧録 下巻 列伝 田鍋安之助」の最後に「カブルより中亜横断莫斯科へ出づる記」が掲載されてる。下記の分の次に位置している。

原典を基本とし、一部旧漢字を改めた。なお補記は [] 内で注記した。

それより君は海路印度に入り、カラチ、ボムベイを経て亜富汗斯坦に赴かんとし、渡邊総領事と共にシムラの印度政庁を訪れた。而してシムラには我カルカッタ領事も居て、引き理に頻りに君のアフガニスタン入境を思ひ留るやう勸告をしたのみならず、印度政庁も又君の此行を喜ばぬ風で、途中生命財産に危険あるも其保障は出来兼ると主張するのである。併しながら君のアフガニスタン入りこそ、今次旅行の主眼の一つであるから、君としては仮令危険に遭遇するも是非決行せねばならぬと決心し、それが為め自分自身に就いては、印度政庁は勿論日本政府にも迷惑は掛けぬと誓つたので、同政庁も遂に渋々と入国を許可することゝなつた。

依つて君は更に亜富汗領事に対し入国許可を求め本国よりの回訓の来る迄シムラに滞在した。其頃シムラには我が参謀本部の本間雅晴少佐が居て、君の此行を壮とし色々世話をしてくれたと云ふ。

斯くて八日目に至り入国の許可を得たので、シムラを出発汽車で国境ペシヤワルに着き、同地で又出国許可を求めたのであるが、此処でも係員は苦い顔をしたが、それでもとうとう之を得て、君は勇躍国境を越へ、竟に亜富汗の首府カブルに到着することを得たのである。而して君は振興の気鬱鬱たる亜富汗に在つて、国王及び政府の要員と意見を交換し、帰途法人未到の中央亜細亜を横断して露国を経、西比利亜鉄道に由り十五年の初夏東京に帰着した。此間の顛末は君の手記が最もよく之を語るものであるから傳末に附記する。

帰朝後君は直に筆を駆つて「アフガニスタン」の著訳に着手し、昭和五年七月之を世に公にし、同十年我国とアフガニスタンとの国交開始し、両国間に公使を交換するに至るや、君は両国々交を助長する見地に基き、之を機会にアフガニスタン俱樂部を創設し、尚ほ同国在京留学生の後援に盡力し、爾来或は集会に或は文書報告に、今猶ほ両国両国親善の為め老軀を捧げて居るが、君は又有色民族に関する見地からシー・エフ・レーの原著「エチオピア帝国」を訳して之を公刊した。

其後伊太利の「エチオピア」侵略に依り、伊工問題が世界の耳目を聳動するや、君は同志と共に同問題の懇話会を起して黒人国に声援を送つたのであつた。

是より先我国は昭和六年満州事変に事端を發してより、時局は益々深刻の一途を辿り、前途実に予測し難き秋、君の如き無私神の如き愛国者の存在は、洵に國家の至宝と謂ふべきである。今年七十八年。

「続対支回顧録 下巻」より（国会図書館蔵による）

M. SEKINA

カブルより中亜横断莫斯科へ出づる記

自分が印度からペシヤワルを経てアフガニスタンに入る時、印度の英国政府が非常に日本人のアフガニスタンに入るのを嫌う風が見へたので、是ではアフガニスタンと国交が開けても、両国人の往来は頗る不自由なものであろう。平生でもそうであるが、万一英国と国交断絶の場合にはアフガニスタンに行く道は無くなるのであるから、印度計りでなく北方からも此国に行く道が出来て居なければなるまいとの感じを起した。此感じが後にカブル〔カブル〕と印度に引返し、日本に帰る予定を変更し、露領を通つて北方から日本に帰る考へを起した重なる原因であつた。

自分がカブルに滞在したのは大正十四年十月から十二月の始め迄約二ヶ月であつたが、こう滞在が長くなつたのは名望上下に偏ねき時のアミール・アマヌラハン陛下に拝謁する希望が自分にあつた計りでなく、文部大臣フアイズ・モハメッドハンからも自分等が拝謁の手續はするから是非拝謁して帰れと勧められたので拝謁を願ふ事にしたが、當時アミールはカンダハール地方を御巡幸中であつたから、御遷幸を待つたのと、御遷幸後御病気の為め更に一週間計りも待つて拝謁した為であつた。

そう云ふ事情であつたから、日本人が来てアミールに拝謁するといふ噂が外間に洩れ露国大使館杯も相當問題にしたので。後に云ふ如く大使館付武官を遣つて自分に逢はしたので無かつたかと思ふ。

さて謁見の事が定まると、外務大臣マハンマッド・タルヂ氏が自分に言ふには、貴下がアミールに謁見の時申さるゝ事があるなら、先ず自分に聴かせて下さいと言つた。自分は道理だと思つたから、私が申し上げたいと思ふ事は二つあります。

第一はマシンハナー（カブルに在る小なる兵器製造所）の大拡張をして将来アフガニスタンで使用する武器はすべて此処で製造して海外から輸入せずと善い様に成さる事です。是が為には数千万円の経費と数十年の年月を要するかも知れません。併しながらたとへ幾千万円掛つても幾十年掛つたも、夫は是非そう成さねばならぬと思ひます。そうでなくて今日の様に武器を外国から輸入し、しかも露領を通るか英領を通らねば入れられぬ様では不安極りない事です。

第二は隣国のペルシヤ、ペルシヤの隣のトルコとは、大抵の事は我慢して、成るべく提携する様に為さる事をお勧め致します。何となればアフガニスタンも此二国も北からはロシアの圧迫を受け、南からは英国の圧迫を受けて、国情が同じですから提携すれば強くなつて圧迫に堪へ易いが、離れ々々では仲々堪へられますまいと思ひます。

私は此二つを申し上げたいと思ひますが、一介の旅行者が初めてアミールに謁見してこんな事を申上ぐるのが、此国の慣例で無作法に當るなら、私は差控へますから閣下から申上げて下さいと言つた所、大臣が言ふには『イヤ私からも申上げますが構ひませぬから貴下からも申上げて下さい』と言つた。それで自分は其心組で居たが、さて拝謁すると、陛下の御話が非常に長くなつて四十分計りも掛つた計りでなく、御病後で在らせられたので、此上又こんな事を申上げては、余り無遠慮であらうと差し控へた。自分は差控へたが外務大臣から此意見は屹度申上げたと思ふ。又アミールの御話と云ふのはこうであつた。『自分は日本と国交を開きたいとの希望があるので、即位以来是々の手段をして希望を遂げんとしたが、今以つて日本から満足な返事が無い。』

とて御熱望の思召を懇々と御話があつた末、『日本の天皇陛下に書面を差上げたいと思ふが持つて往つて呉れぬか』との仰があつた。是に対しては自分は官位も無き一個の旅行者で、そういふ重大な任に當る資格はありませんと言つて御断り申上げた。併し棒持して帰り當局者に提出して思召のある所を御伝へ致しませうと申上げた所、善し、さらば外務省から送らせると仰せられ、其場で通訳の任に當つて居た外交官に御指図あり簡条書にさせられた。夫れから約一週間も待つても、まだ外務省から書面を送つて来ぬので催促に出掛けた所、書類は出来たが一応陛下の御目に掛けて居るから、お下げになれば送ると言つた。是で見ても此書面は如何に陛下のお思召其儘であるかが分る。此謁見に先だつ事十数日、自分が泊つて居たアンデロビ・ホテルの庭を散歩して居ると、取次も無く突然其所に柔和な欧州紳士が尋ねて来て『アナタは日本のプロフェッサーではありませんか』と言つた。自分は元東亜同文会の理事をして居た。然るに同会には一定した英語の名称が無いので Far Eastern Educational Association と自分で訳して、其エキスダイレクターといふ名刺を持つて諸国を歩いた。夫れで何処に往つても自分をプロフェッサーとして

扱ふので、一々言訳するのも面倒だから言はるゝが儘に為つて居た。夫れで右の問に対して『そうです、日本の旅行者です』と答へた。すると、

彼『そう聴いて尋ねて来ました。』

我『そうですか、夫れなら私の部屋は寒いですから（此ホテルにはストーブも無かつた）此処に掛けて御話を伺ひましょう。』

彼『私はロシアの大使館附武官です。』

我『ロシアの大使館附武官はゼネラルだと聴きましたが、貴下は其ゼネラルですか。』

彼『そうです。』

我『お名は何と云ひますか。』

彼『リンクと云ひます。』

我『夫れでは貴下はゼネラル・リンクですか。』

彼『そうです。』

自分が何故こんな事を尋ねたかと云ふに、或る日在カブル・ジヤーマンスクール（俗称）の独逸人校長と会食した時、その校長が言ふには、『御覧なさい、ロシア大使館には大使館附武官として将官が居ります。こんな事は余り例の無い事です。是で見てもロシアが印度方面或はペシヤ湾に出ようとする意思が帝政時代でもソ連に為つても少しも変らぬ事が分るでしょう』と言つた事が耳に残つて居たからである。此紳士は宛ら英国紳士の如く流暢に英語を話し風采態度極めて温厚であつた。自分はヒンドクシユ山脈北方に當るアフガントルキスタン地方の事を尋ねた所、手に取る如く教へて呉れるので、閑談時余に亘り最後に斯ふ云ふ問を發した。

我『若し私が陸路中央アジアを経て莫斯科[モスクワ]に出で、莫斯科から西比利亞線で帰朝し様と希望したなら、夫れが実行出来ましようか。』

彼『どうして実行の出来ない事がありましようか。』

我『アフガニスタン国境から莫斯科迄大した危険は無いでしようか。』

彼『どうして危険がありませう。日本は危険かも知れませんが、ロシアには危険杯ありはしません。』

自分は少々矯激な返事の様に思つたが、大体大した危険は無いと判断した。夫れから旅費の事を問ひ質した所、是も印度に引返して帰朝するのと大して差は無い事が分つた。依つて更に尋ねて言ふには、

我『自分が東京を立つ時にはロシアとはまだ交戦状態であつたから、ロシアは自分の旅券には記入してないが、是でもヴィザが貰へましようか。』

彼『多分貰へましよう、夫れは大使と相談されたら善いでしょう。』

是で話を打切つて、ゼネラル・リンクは歸つた。其日午後、自分はロシア大使館に往き、スタルク大使を尋ねた。大使館は普請中であつたが、自分が名刺を出すと、白シャツの儘数人の青年紳士に取巻かれて玄關に出て来て、自分を迎へ一室に誘ひ、円卓を取囲んで談話を始めたのがスタルク大使であつた。自分は旅券の事を話出して、ヴィザの貰へるや否やを尋ねた所『夫れは貰へます。必要があれば今日でも上げます』と言つた。依つて自分は場合に依ればロシアを経て歸るかも知れぬと言つた所、大使は『ソ連の教育制度は他に類のない一種特別の者だから見て行かると善い』と言つてロシア行を勧むる口吻であつた。尚ほ自分は途中危険の有無を尋ねた所、危険はありません、尚ほ當大使館から沿道の役人に保護せしむる様書付を上げますと言つた。

自分は右に述べたゼネラル・リンクやスタルク大使との会見で露領通過には大した危険は無いといふ自信を得たので、此一週間計りアフガニスタン国境迄の事を調べた所、是も大した困難は無い事が分つた。自分は前にも言つた通りアフガニスタンには印度から入る計りで無く、北方から入る道も見付て置かねばならぬ、北方から入る道も無いでは無い。然るに日本人はまだそんな道があると思つて居ない様である。自分が無難に通れたなら、夫れが何よりの証明だから、是を通つて見ようと思つたのが、予定を変更して露領を通過し、サイベリヤ線で還る事にした、主なる動機であつた。併し是を執行するに多少の困難はあつた。その第一は自分には防寒服を造る余力の無かつた事であつた。自分は最初カブルから印度に引返し帰朝する予定であつたから、冬服は総てポートサイドから東京に送り返し、カブルには夏服の儘で往き、冬服は持たなかつた。然るにカブル滞在二ヶ月に及び、十二月の始めと為つたので、是よりヒンドクシユ山脈を越へ露領を通過するとなれば、一年中の最寒期に最寒地帯を通過する事になるので、防寒の用意をせねばならなかつた。然るに是は少しく話が岐路に入るが、自分はカブルで旅費が盡きた。然るにカブルに

は銀行も無く郵便は有つても、万国郵便連盟に加入して居ないので、外国為替が取組めず、仕様がなかつたので、已むを得ず、仏国公使エム・チヨウベ氏に面会を求め、同氏に頼み同国外交機関を利用して、銀行の用をして貰ひ、僅に数百金を東京より取り寄せる事にした。即ち東京の知人に頼み東京仏国大使館に所要額を払込ませ、払込の電報が東京大使館より来ると、同額をカブルの同公使館より渡して貰ふ方法を立て、其実行を頼んだ処、仏国公使エム・チヨウベ氏は快く之れを引受け、実行して呉れたので、その好意は自分が長く忘るゝ能はざる所である。併しながら電報料が高く払込みも四百金に過ぎざりし為め、一半は電報に差引かれ、僅にホテルの払を済ませて出立した次第で、充分防寒服採調へる余裕は無かつた。然るにアミール・アマヌラハン陛下に謁見せし時、既に北路を取つて帰朝する事が定まつて居たので、夫れを察せられし者が否や不明なれども、引出物として賜はりし者は大抵旅行用の物で、その内に駱駝の毛皮のアフガニスタン流外套があつたのと、時の文部大臣ファイズ・モハンメツドハンより贈られし羊毛皮のアフガニスタン風上衣があつたので、只防寒用長靴一足作つた丈で、北行の途に上る事が出来た。

その第二は通訳が一人無ければ国境迄の旅行が出来ない事であつた。然るに文部省兼商務省の通訳館にマハンマツド・アミル・アズツドと云ふ、ウジリスタン出身の非常に親切な青年があつた。此人は八ヶ国の言語に通じ、三日に一度は自分のホテルにやつて来て、色々世話をし呉れた人であつたが、この人が言ふには通訳がなくては用が足せないから、『私が国境迄送つて上げようと思ひますが、私は仕官の身だから、政府の許を受けなければなりません。併し夫は貴下が外務大臣マハンマツド・タルチ閣下に御頼みあれば屹度出来ると思ひます』とコウ言つた。依つて自分は早速外務大臣に面会を求めて、『通訳を一人付けて下さらぬか、しかも私は旅費に窮して居ますから、夫れを官費で付けて下さらぬか』と言つた所、大臣は考へた風で直ぐには返事をしなかつた。依つて自分は言つた、『私が今度北方の道を通つて日本に帰るのは北方からアフガニスタンに来る道を開かねば、印度を経る道だけでは両国の往来が不安だから、その道を開かうとする為めです』と、そうすると外務大臣は直ぐに承知して『夫れならば何んでもやつて上げます』と言つて通訳を付けて呉れた計りでなく、馬も四頭官費で付けて呉れて、自分と通訳の乗る馬と、二人の荷物を負はせ夫れに必要な馬夫も附けたので、二人の護衛と共に一行相當の人数に爲つた。しかもこの護衛は後に言ふ如く露人ダニーロフ一行をも兼ねて護衛するのであつて、途中より此の露人一行が加はつたので、更に大勢になつた。夫れは善かつたが、通訳には自分が希望するマハンマツド・アミル・アズツドでは無くして、外務大臣の甥モハンマツド・アシフ・ハン (Mohamad Asif Khan) を付けて呉れた。此人物には自分は終始少からず迷惑した。

其第三は自分が持つて居た金では、兎てもカブルからモスコウ迄の旅費には足りなかつた事であつた。併しながら自分の持つて居た正金銀行の信用状にはまだ少しの金は残つて居たから、首尾よく夫れがタシケント辺の銀行で取ればモスコウは勿論浦潮辺迄の旅費があつたが、カブルのソ連大使館で意見を訪ふた所、タシケント迄行けば其所の銀行で多分取れるであろうと言つたので、自分は万一を顧慮する暇なく、断然カブルを立つ事にして、ヴィザと沿道役人への書付とを大使館で貰つた。その日であつたかと思ふ。大使館で事務を執つて居たダニーロフと云ふ官吏が、近日中にカブルを立ちモスコウに帰るから、途中で一つになるであらうと言つて紹介された。後に言ふ如く此一行とはバミアンで一つに爲つたので、衛兵はこの一行と自分等一行を兼ねて護衛するのであつた。斯く用意が出来、十二月八日カブルを立つた、実に自分六十二歳の歳暮であつた。

中央亜細亜横断日記

十二月八日 (第一日)

早速起床行李を結束す。十時通訳 Mohamad Asif Khan 君及護卒二人、Asif君従僕一人と共にアンデロビホテルを出発す。馬五頭、驢一頭之に従ふ。十二時デーケバック野外に昼食す。カブルより三アフガン里なり。一時出発一時間を費して一小山脈を越へ、此小山脈と山顛に疎雪を戴けるバグマン山脈(?)の間に在る、広さ一哩斗りの谷地に沿ふて行く。道路は幅四五間の大道にして、小石を以て打固めれば雨後も泥濘の憂なかるべく、途中無数の駱駝、驢馬等の小隊商に逢ふ。道路の両側にはポブラ、桑の老樹、揚樹等を植ゆる処少からず。五時サライホジャヤに着し站店に入る。多数の隊商既に来往せり。余は通訳と共に二階の一室に入りし

が、室に臥床なく、地上に敷物を広げて其上に臥す。余は国王より贈られし毛皮を敷いて其の上に臥せり。室の中央に薪を積んで火を起し、蠟燭を点じて明を取る。宛然支那に於ける戦時の光景なり。余は日清、日露両戦役の當時を偲ばざるを得ざりき。是れより国境迄総て夜間は斯くして宿泊するものと聴く。駄馬の持主にて通訳の下僕たるハーシムも余等と同室に臥す。兵士二名は別室に入れり。余は兵士に一名五ルピーを遣はせり、テルメツにて又同額を給する筈なり。七時眠に就く。此日三十余年来始めての騎行にて、站店に着きし時脚硬直するを感ぜり。されど疲労は格別の事なかりき。通訳には往復旅費五十ルピー、兵卒には一名三十ルピーづゝ政府より支給せりと。此日行程アフガン里十二里。

十二月九日（第二日）

午前八時半発程、昨日と同じ谷地をヒンドクシユの雪線に向つて進む。路の両側に老桑の街路樹あり。此日両股の痛みを覚ゆ。中食を取る事なくして騎行を続けし為め飢えを覚ゆ。昨日と同じく菓物、陸岩（石塊の如し）薪炭等を駝載せる駱駝、馬、驢等の小群途に絡繹たり。二時半チャーリコールに達す、カール・マザリセリーフ間の最大駅なり。茲に投宿す。門を入れれば広大なる広場あり。此処に荷を卸させたる多数の馬、驢馬食を取りつゝあり。広場の周囲は一段の回廊となり居り。この回廊に面して百にも近き客室の入口あり。客室と云へば仰々しく聞ゆれども、何の装飾もなく、一の器物もなき土間なり。上には天井もなく屋蓋を為せる木の小枝が露出し無数の蜘蛛の巣が之より垂れて居る。誠に結構なる客間なり、土間なるが故に外国人の旅行は総て組立臥台を携帯すれども、余には之を購ふ余力もなく、此処に来る迄は其必要も知らざりき。右の広場の外側に更に一の広場あり。此処には多数の駱駝荷を卸して休憩し、其傍に駱駝の持主荷物に據りて座せり聞く彼等はその儘露天に眠るとぞ。この広場の周囲は物売場と為り、色々の日用品の売店軒を連らぬ。この広場の門を出ればこの地のバザーにてカール市に見る如き多数商店軒を並べ、賈客雲集往来織るが如く雑沓を極む八時眠に就く。此日騎行約十里（アフガン里）、通過する所は地味膏腴葡萄園麦園相連り灌漑用井多数を見る。路傍に泥土団に葡萄を包み売るものあり。小兒に綿を抱かせその母小兒を抱いて驢に乗るものあり奇観なり。

十二月十日（第三日）

朝六時半起床、八時出發昨日来の路を北方ヒンドクシユの雪線を望みつゝ馬を進む。朝靄近山の麓に罩め爽気頗る佳なり。十時プレマターリに達す。郊野盡きて路、將に山に入らんとする所にあり、一清流に臨み風色此地方稀に見る処、一高地を選び野外に朝食す路は是れより山峡に入り、前の清流に沿へり。河は水量豊富清冽掬すべく、余アフガンにも斯る河あるかと怪めり。聞くアフガン人が誇とせるゼブルサラージの発電所は是より数里の近きに在りと。恐らくは此河水を利用せしものならん。此日の行程十六里、昼食をも取らず山峡中の騎行を続け、午後六時暮れて同狭中の一駅シャーゲルトに着き投宿す。此日十時以後の行程は、総て両山近く迫れる間を河辺に沿ふて行くものなれども、平坦にして急坂なく、自動車を通すべく、四騎轡を並べて行くべし。路傍には老揚樹の並木あり。唯だ此日は騎行第三日にして而も十時間の久しきに亘りしより、余は内股及臀部に痛みを覚へぬ。

十二月十一日（第四日）

朝起、屋後の清流に嗽ぎ神気爽快なり。午前七時四十分出發、護卒余等に先つて發す。余は彼等が事に託して被護車の囊中より常にルピー搾取を事とするを知り不快を感ぜり。此日も亦昨日の河即ちオールバンド河に沿ふて進む。昨日と同じく一木一草もなき軟岩山の峡中に行くものにて、何等の景致なく唯河声の耳に適すると奔湍の岩に激して白沫の目を悦ばしむるあるのみ。二時峡漸く盡きて稍敞開せる処に到るや、左方数哩の処に白雪皚々たるヒンドクシユ山脈の婉々たるを望む。昨朝十時此山峡に入りしより二日の行程約四十哩、唯殺風景なる岩山の間を経來りて、今俄にこの天然美に接す。壯絶快絶なり。オールバンド河はヒンドクシユの雪融けて流れて河と為るもの、余即ち河に下り馬に飲ひ手に水を掬して飲む。神気爽快なり。四時半河畔の村ダーニーネルフに宿す。この日の行程アフガン里十三里なり。此夜サライ(客舎)に宿泊せずして売店に宿泊せしとて、通訳君駄々を捏ね一時余を困らせぬ。

十二月十二日（第五日）

朝起清流に嗽ぎ、八時二十分出發、前日の河に沿ふて進む。河盡きる所にて一山を越ゆ。本道は氷厚く滑脱の恐あるを以て捷路を取る。坂急にして騎行すべからず。一行馬を曳き歩して登攀す。登り終れば左方ヒンドクシユの雪嶺を目睫の間に望み、下には駱駝隊の迂路を辿りノソリノソリと歩くを望み、前方には馬隊の鈴の音を響かせつゝ山腹昇降に三四時を費す。山を降り行く事数時、三時半チユンプルに達し、此処に宿す。此日行程九アフガン里に過ぎざれども、山を越へしが故に相當に疲れを覚ゆ。前記の山は分水嶺をなし山北の水は北に流る。昨日一自働車の赤旗を樹てゝ後方より来りバミアンの方に距るを見しが、今日その自働車に十人斗りの露人（数人の婦人を雑ゆ）を載せて、カーブルの方に赴くに逢ひ、又二人の露人飛行家騎馬にて二人の衛兵を連れ同方向に行くに逢へり。余をして露人のアフガニスタンに往復するもの少なからざるを思はしむ。我一行にも終始一人の露人飛行家加はり、宿舎を共にせり。大使館書記官ダニーロフ君の荷物を護送してバミアンを経てモスコウに帰るものと云へり。

十二月十三日（第六日）

早起前川に出でゝ顔を洗はんと欲せしも、河辺悉く凍り容易に水流に近づくべからず、宣なり昨夜寒威の凜冽なりしこと余は辛ふじて顔を洗ひ齒を磨くを得たり。八時半出發昨日来の河水に沿ふて下る。兩岸岩山左右より迫り、壁立数丈より数十丈に至り、其間纔に一路一水を通ず、斯の如きもの三四哩真に一夫路に當る万夫過ぎ難きの天嶮なり。十一時半一水の東より来り前記の河に合するに逢ふ。是れより道を転じ、其水流に沿ふて遡る。この河は水量の豊富なる流水の清冽なるオルバンド河に譲らず、是れ亦ヒンドクシユより発源するものたるは遡るに従つて、上流遙かにヒンドクシユの雪脈を望見するに由て知得べし。午後四時バミアンに達し、有名なる仏像前の一サライ（客舎）に投宿す。駄句

我宿は千年昔の御佛前

仏像は大なるもの男女二体、高さ四十四呎と聴く。軟岩壁に彫刻せしものにして共に顔部を毀損す回教侵入の時破壊せしものなるべし、右の岩壁には仏像の外無数の洞窟あり。この日余馬より墜つ。墜落の原因は五時間余連続騎行の結果、両脚硬直して鐙を踏張る力を失せし際、隣馬（通訊の馬）が急に駆け出せし為め、我が馬も亦俄然駆け出せしに由る。此日行程十アフガン里なり。バミアンは此旅行に一区画を為すものにして、是処迄は自働車を通ずれども、是れよりはヒンドクシユの山路に入るものにして自働車を通ぜず、カーブルよりバミアンまで約七十里なり。

十二月十四日（第七日）

この日護兵馬卒等一日の休憩を希望せしと、バミアンより露国大使館書記官ダニーロフ君夫妻モスコウに帰着するもの同行の筈なりしに十三日到着せず、依つて一日待つ事としたる為め、此日はバミアンに休憩せり。午前この地に有名なる仏蹟を見ぬ、仏像はバミアン河の南方に壁立せる一連の軟岩壁に彫刻せられたるものにして、大なるもの三、其内左右二像西方なるもの男像にして東方のもの女像なれども、画部は全部破壊され、その何仏たるを識別すべからず。大仏像の外小仏像数個あれども是れも破壊甚し。仏像の外この岩壁に無数の岩窟あり。元と人の住せしものたるは明らかなれども、僧侶の住せしものか又は巡礼者等の宿坊に充てしものなるや明かならず。余は此仏像を細解する暇なく、且つ何等彫刻の時代を知るべき文字等を見る能はざりしも、多くの説に據れば回教徒入前のものたるは誤なかるべし。Dr. Iven氏は五百年より六百年（世紀）の間に彫造せられしものなるべしと云へり。右の岩壁に沿ふて小モスクあり。二十人斗りの小堂、寺子屋式にコーランを習へり。旧式の教育は此寺小屋的のものにて先ずコーランを教へ夫れよりペルシヤ語を教ゆるものとぞ。仏像のある岩山とバミアン河を隔てゝ兩丘あり。一丘には知事公邸あり、その内に小学校（新式）兵營等あり。他の一丘は騒ぎの城（Castle of Noise）[シャリ・ゴルゴラ]と唱へられ、古昔何れの代にか築城せし城置の廢墟にして、今尚ほ騒の音の聞ゆればとて斯く名けしものなりとぞ。五時ダニーロフ君夫妻担架にて到着し、余の隣室に入る。君一行は室内ストーブ等を携へ、全然西洋式旅行用意なり。余の目を惹きしはミセス・ダニーロフ君の旅姿にて騎行の用意男子と異ならざりし事なり。ダニーロフ君余が室に挨拶に来りし時、煙室内に満ちたれば早々にして逃出せり。数刻の後、余は招かれて晚餐の席に列し此処にてチヨーコレートの御馳走は千金の値ありき。ダニーロフ君夫妻は最早カーブルに帰らざるものなり

とぞ。前日の自動車も大使館のものなる事を確かめ得たり。ダニーロフ君夫妻バミアン到着早々疲労あるべきに、甲斐々々しく立働きの用意を為しぬ。翌日も早起行李を結束し駄載を監督しぬ。彼は大使館書記官と聴けるに、その甲斐々々しさ斯くの如し。働かざるものは食ふべからずとの勞農政府の信条を思はしむ。聞けば此度の帰国は転任との事なるに、其荷物も比較的輕装なり。四馬に大トランク三個、スーツケース、ズツク包等數個を駄載するのみ。而も一切の寢具食器を含み、組立寢台、室内ストーブ煙突迄含めるを思へば、書記官官吏の転任旅装としては輕装と言はざるべからず。而かもダニーロフ君自身は一駄の宰領として其駄馬に乘れり。若しダ君の拳動を以て勞農政府官吏の風習を代表するものとせば、帝政時代官吏の惡習は一掃せられたるものと云ふべし。ダ君の拳動を我が通訳が一僕を従へ、自らは指一本動かさず、唯顫にて指図し、傲然自ら居るに比すれば、其差如何ぞや。余は垂細垂諸邦の振はざる其道德の低下と斯る惡習に主として起因すと思ふ。

十二月十五日（第八日）

午前八時半出発、此日よりダニーロフ君夫妻の加はりたる為め一行遽に賑かになれり。十時半バミアン河の本流を離れ其左支流に沿ひて上る。河面厚く凍結し唯其一部に水流を見るのみ、十一時半水流路上に溢れたるもの凍結して滑脱騎行すべからざるより一行皆馬を曳き山峯に急造せられたる細逕に沿ひて行く。斯の如きもの約半哩、稍急なる坂を攀づ、此坂路を登り終れば水流北に流る。二時アリラバツトに着し、此処に投宿す。余はバミアンより先は非常に險峻なる山路に入るものと思ひしに、此日通過せし所はバミアン、カール間と大差なく、道路も略ほ同様にして四騎並駆すべく自動車行にも難からざるべしと思ひぬ。唯道路上石の突出せる所、岩の上より墜落せる所、諸所にあるのみ前記一箇所を除き少しも峻急の坂路なし。前日及本日通過せる路傍の岩壁には、無数の洞窟あり。居民之に據つて居を構ふるもの少からず。

この辺路の山には尚ほ積雪なし。然れども寒威は昨日に比し強烈なり。アリラバツトよりは二三の山を隔て、北方に白雪皚々たる山脈を見る。前夜余が通訳今後の旅費として尚ほ二百ルピーを有する事を打明けぬ。往復僅に五十ルピーを政府より支給せられたりと云ふ過日の話は恐らくは詐なるべし。アフガン紳士の嘘は尋常茶飯事なればなり。此行宿舎の不潔なる往時の北支那旅行に比するに更に數等を加へ、衣服も身体も塵に塗みぬれば

このたびは夜々のやどりのむさくれで
人も荷物もちりにうもれつ

アリラバツトにて一夜の炊事と、翌朝暖を取るに堪ゆべき五六本の薪に、二ルピーを支払へり。此辺薪の欠乏知るべし。

十二月十六日（第九日）

朝八時アリラバツト出発。二三十分に於てアリラバツトパツスに至る。可成り峻急の坂路あり。下りには歩いて馬を曳き降らざるべからず処少なからず。昇降一時半を費してこのパツスを過ぎ、是より一溪流に沿ひて下る事七八里、此間岩石の山上より多数墜落して途を塞ぎ、或は河水道路に溢れて凍結し、滑脱騎行すべからざるが故に傍路をとつて進まざるべからざる処少なからず。ヒンドクシユに於ける難道路の一たり。三時半一水西より来つてこの溪流に合するに逢ふ。水量の多き、水清き、バミアン河に譲らず、是より此河に沿ひて上る。山間ながら田園能く開け、二三の大村此沿岸に在り、道路広濶、街路樹整然たり。五時スエイゴンに着し此処に投宿す。此日行程十二里、夜ダニーロフ君の室にてココアの馳走に預る。

十二月十七日（第十日）

午前七時五十分スエイゴン発、約一時間にして一山路に掛る。上りは曲折數十を重ねたる坂路なれども比較的的道路整然として騎行に差支なく、約一時間にして絶頂に到りしが、下りは坂路峻急なるのみならず、岩角石塊路を塞ぎ、到底騎行すべからざるを以て歩いて馬を曳き、注意を加へつゝ下るも猶ほ馬の足を滑らし、失脚せしめんとするもの屢、是れ即ちダンダンシカンのパツスにして、ヒンドクシユ兩難所の一たり(他の一はカラコタールと云ふ。)此パツスを下り終るに約二時間の久しきに及べり。二時コマルに着し此処に投宿す。ダンダンシカンの下を流るゝ一河に臨む。この河は水量最も豊富、水勢矢の如し、この沿岸にも田園開け果樹多し。この日は行程僅かに六アフガン里に過ぎざれども名にし負ふダンダンシカンを追加せし事とて、余は疲労を覚へたるの

みならず、身体動もすれば戦慄を起さんとし、持病の腎臓に障らざるかと気遣へり。此日も亦ダニーロフ君の室にてココアの馳走に預る。八時眠りに就く。

名にしおふダンドンシカンけふ越へて
コマルの里に今宵とまある

此日露油を積載し北方より来れる駱駝隊二三に会う

十二月十八日（第十一日）

朝九時半コマル出発前日の河に沿ふて下る。沿岸果樹(杏の如し)園数哩河岸に沿ふて相連る。一時頃一濁水溪流の来つて此河に会するに逢ふ。是れより路を転じ此濁水溪に沿つて遡る。この溪流は他の谷間より、一岩山を裁断して来るものにて、其裁断の処両側の岩壁直立数十丈、天日を遮蔽し、中間唯唯一水一路を通ずるのみ、天成の一大関門なり。一個の岩壁に洞窟多数あり。河の為めのものなるやを知らず。二時半マデルに達し此処に投宿す。此日行程八アフガン里、道途平坦なり。連日の騎行中駄句の浮ぶもの少からず。

けふもまた雪の雫にみずかひて
山路わけいる駒のたびかな
日をかさね夜をかさねつゝわれ入れば
入る程ふかき山路なりけり
ヒンドクシ越え行く駒の通路は
岩と岩とのあわひなりけり
白雪をふみわけてとぞおもひしを
日毎々々に岩の山道
白雪を於ちにながめて我駒は
岩と岩との中をこそ行け
朝日をば背にあびつゝ行く駒の
あがきもかるし朝のいで立
つかれてはこゝもわが家むさくとも
いねてはむすぶ故郷の夢
この年も又くれ行けどかへらねば
わが子らいかにわれをまつらん
たびはうしうきになれつる我身にも
などいたづらにかへらざるべき

十二月十九日（第十二日）

朝八時半マデル出発、約一時間にしてヒンドクシ越の最難所と称せらるゝカラコタルパスに掛る。羊腸たる山路行て又復るもの十数回、漸くにして頂上に達す。頂上には処々薄く積れる雪あり。道路広濶なり。頂上を歩する事数十分乃至一時間、降路に就く。一行歩して馬を曳き降る。然れども下りはダンドンシカンの如く急峻ならず。道路も亦岩角石塊少し。此パスの難所は上り(南方より来る時に在れども、攀登の困難は余の予想せし程に在らず。従者に轡を取らしむれば騎行し得べき所大部分を占む)に一時間半を費し、昇降に約三時間半を費せり。さればパスを下り行く事約一時間にして更に第二のパスあり。上りは前パスの三分一にも足らざれども、下りは殆んど前パスに譲らざる長さを有す。急峻の度も亦略ぼ之れと似たり。本日の旅行は主としてこの両パスの通過なりき。三時頃全く両パスを通過し終り、四時ドウアオ(二水の義)に着し、此処に投宿す。此日行程九アフガン里。是にてヒンドクシの両難所たるダンドンシカンもカラコタルも共に通過したれば、余は大に心を安んじぬ。

カラコタル越へしぞうれしこよひこそ
駒もやすらへ、我もよくねめ
日は近し千仞の底に谷見へて
我駒高く一声鳴きぬ(カラコタルの絶頂にて)

十二月二十日（第十三日）

午前九時ドウアオ出発。一水に沿ふて下る。約一時間にして道の両側岩壁直立数十丈、天日を遮蔽せる処に到る。中間唯一路一水を通ずるのみ。斯くの如きもの約二哩、眞に天嶮なり。之れを出づれば一の峠を越ゆ。昇降急峻ならず、殊に絶頂に好道路あれども降路の延長長くして且つ嶮悪、一行歩して馬を曳き下れり。この坂を越

ゆるに約二時間余を費せり。三時ルイーに着し、此処に投宿す。偶々露国より来れる露人の男一女二なる一行此処に同宿するに逢ふ。彼等はカーブルに赴くものにて、ダニーロフ君の知れる者、即ち一人は大使館書記官レックス中佐夫人、一人も亦他の大使館員の妻、男一人は自動車運転手、女は共に二十余歳なり。

此のたびはつづくいはほのやまにして
飯をかしがん柴だにもなし
歴山 [アルサダ -] が越へしむかしをしのびつゝ
駒すゝまするヒンドクシユ越

十二月二十一日（第十四日）

朝起き前川に嗽ぐ。流水水面を覆ふて流れ、手指断たんとす。九時出発、川に沿ふて下る。約一時にして数十丈の岩壁間を通過す。之れを過ぎ一山を越ゆ。坂路急峻ならざるも昇降頗る多時を要す。両山越へ終り、一水に沿ふて下る。流水河面を覆ふ。須叟にして壁立十丈の岩壁間を通過する事約二哩、漸く岩壁の間を出で、田園少しく開け、果樹多き処にホーラムあり、三時半此処に達し投宿す。此日一大羊群に逢ふ。其数三四百もありしならん。アフガン内地到る処羊群を見るも斯の如き大群は稀なり。又前記の山上にてレックス中佐のカーブルに赴くに逢ふ。ダニーロフ君は勿論余も同君とは一面識あり、暫く立談す。

十二月二十二日（第十五日）

朝八時ホーラム出発。十一時又岩壁の間に至る。昨日の河の兩岸に在り。壁立四百尺より七八百尺、斯の如きもの十余哩。真に天然の一大砲壘なり。五時半ハイバツクに着く。ハイバツクは前記岩壁の盡くる所にして又実にヒンドクシユ山路の盡くる所に在り。この地方の一都会にして、カーブルのバザーに似たる小バザー在り。此日の行程十七アフガン里。道路河岸に沿ひ、岩角露出し石塊磊塊として途に横はり、特に小坂路稍急峻にして騎行に便ならず。歩して馬を曳き過し処少からず。又一断崖より人馬共に墜落せるものあり。骨肉飛散、鮮血淋漓、觀者慄然たり。ハイバツクに到り道路極めて良好となる。昨日来の下り来りし河は石灰色に混濁せり。河名を知らず。仮に之れをハイバツク河と称すべし。本月十日山路に入りしより此の日まで、十三日を費して漸くヒンドクシユ山脈を横断するを得たり。此夜月明駄句あり。

酒あらば酌まなんものをヒンドクシ
越へしこよひは月もよければ
夕月の出づる峰こそ我駒の
きのふ過來しあたりなるらん
小夜ふけてサライの夢のさめぬれば
駒の草はむ音のみぞする
鶏の声三度きこへぬいざ起きて
けふの旅路のよそひをぞせん

十二月二十三日（第十六日）

午前十時ハイバツク出発。騎行二時間。麦圃果樹園相連る間を過ぐ。この辺田園能く開け、村落相接し、是迄の山路と同じからず。二時間の後低き一山を越へ、直に又他の一山を越ゆ。山路急峻ならず、道路良好なり。両山越へ終り程なくアズラテソルトンに至る。時に午後三時過なり。此処に投宿す。此日駄句浮ぶ。

をちこちをさしつかたりつ駒なべて
小春日和の旅心地かな
故郷はまだ道遠し朝日づる
あの山越へてまた越へて千里万里の先にこそあれ
おみなめし駒をならべてヒンドクシ
おのこと共に越ゆるをゝしさ

(Mrs. Danielosを詠む)

此の朝馬に乗らんとして尾骨を打ち、夜に至つて痛み止まず。又数日前より頑固の感冒に罹り咳嗽甚し。此夜ダニーロフ君来り、明日の行程に就き相談あり。此地郊外丘上にアズラットソルトン記念堂的墳墓あり。

十二月二十四日（第十七日）

早起氷を砕き濁流にて顔を洗ふ。

濁江の氷をくだけ顔あらふ

此族ばかりうき旅はなし

午前十時アズラトソルタン出発。濁水に沿ふて下る。道路平坦自動車を通ずべし。二時サイヤットに着し、此処に投宿す。余等はタシクルガン迄到らん事を望みしも、ダニーロフ夫人長途の行程に堪へず。護兵は我等の一行と、ダニーロフ君一行とを共同保護するものなるを以て同君一行の便を図り、此処に投宿せしなれ。此辺綿花栽培の跡多し。誠に一の綿花植物を検せしに、稍大なるものは一本にて三十乃至五十の桃を有しぬ。アフガン元来の綿花なりと。明日はクリスマス。去年の今日はシャートルより自動車旅行に上りし日なれば

地をめぐりてかはり行く

ちりの旅路に去年をこそおもへ

サライにて

ねむるてふこそ神の恵なれ

かゝるいぶせき旅の宿にて

こそこのけふ雪の旅路に立ちつるを

今はアジアのちりの旅かな

シャートルを立ちしは去年のけふなれど

遠き昔のこゝちこそすれ

十二月二十五日（第十八日）

午前十時サイヤット出発。昨日の濁流に沿ふて下る。一時岩山の峽を出で、二時タシクルガンに着し、此処に投宿す。此の日行程僅に五アフガン里と称すれども、七里はありしと思ふ。ハイバツクよりタシクルガンに至る間は、尚ほヒンドクシユの支脈ありて、田園遠く開けず、道路は平坦旅行なれども、尚ほコンドクシユの山路に算入するを妥当とす。タシクルガンに至りて始めて北方の一望無涯の大平原を見る。句あり

ヒンドクシきたにくだりて駒入るる

トルキスタンの大野原かな

タシクルガンは此地方繁盛の一区にして、人口一万二千、兵營あり、知事官邸あり、バザーも稍大なり。ハイバツクより遙に繁華なり。舶来品は石油を除くの外、印度経由のもの多し。果樹園極めて多く、特に石榴の大なるものあり。此日露人の一行五人と逢ふ。彼等ジャブルサラージ付近なるサヤンに赴く道路技師なりと云ふ。其内英語を解するもの一人ありき。

十二月二十六日（第十九日）

朝八時タシクルガン発。平野の中を行く。午時ナイプアバットに小憩。夫れより約一時間道路嶮悪、河原の如き処を行く。夫れより小山を越へ、五時ゴリマルに着す。山よりゴリマル間道路亦善し。ゴリマルに投宿す。此日行程十四アフガン里。

駒止めてすぎし峰々ながむれば

はや白雲の立かくしつゝ

十二月二十七日（第二十日）

朝八時半ゴリマル発。十二時半マザリシャリフに着。ダニーロフ君一行は露国領事館に入り、余等は外務官吏出張所に宿す。邸園広濶、果樹満園、水を引いて其中に流し、此旅行中曾てなき快適の宿舍なり。知事の心付にて優渥なる待遇を受く。露国領事も亦人を遣はし懇請せらる。余は其厚意を謝して辞す。此日浴を取り、快適始めて人間に返りし心地せり。

十二月二十八日（第二十一日）

此日ロシア領事官に赴き、領事に面会して謝辞を述べ。領事の姓名を忘れたるは遺憾に堪へざるが、同領事はマザリシャリフより国境迄は馬上にて尚ほ二日を要するが故に、馬車にて送らすべしと申出でられしも、自分は之を固辞したるに、領事は斯く固辞せられては、已むを得ざればトルメツツ領事に打電し、彼地にてなりと微忱を致すべしと言へり。露国領事館にてダニーロフ氏に逢へり。此日なりと思ふ。

マザリシャリフ知事の来訪を受け、暫らく閑談して帰る。知事より聴く所に拠れば、マザリシャリフの人口約貳万、過半ウズベク人なりと。此日税関吏自分等の宿泊せる外客接待所に出張し来り、荷物を検査せり。

十二月二十九日（第二十二日）

マザリシャリフ唯一の緑瓦モスクを見る。総ての建築土造の者のみなるに、此モスクは青瓦を以て覆ひ、アフガニスタンには珍しき建築なり。祈祷の時間と見へ、夥しき信者の出入を見しが信者以外の者は入らしめずと聴き遠くより佇立して眺めしのみ。

十二月三十日（第二十三日）

十二月三十一日（第二十四日）

マザリシャリフより国境アムーダリア河畔迄に二日を費せしが此間一哩余もあるべしと思はるゝ大なる廢墟を通過し、この廢墟は何の跡なりやと通訳に問ひしも、彼は知らず、依て土地の者に問はしめしも知らず、是れは昔より此状態にて有る者なりと答へた。去れど其位置より考ふれば、東洋史に有名なバルクの一部たるや疑なし。バルクは二千余年の久しき東洋の大都であつて、幾度と無く此地方で興つた強国の首府と為り、ゾロアスターが初めて拜非宗を宣伝したのも此都であつた。仏教が初めて支那に這入つたのも此都であつた。歴山大王東征の時も、この都に二年間足を留めた。然るに数百年前より廢墟と為り、其繁昌はマザリシャリフに奪はれた觀がある。マザリシャリフは古のバルクと比較すべき大都では勿論無いが、ヒンドクシユ山脈以北のアフガニスタン即ちアフガントルクキスタンでは第一の大都市で、其バザーはカーブルに勝るとさへ言はれて居る。

三十日の夜は或る一村（名を忘る）に宿泊したが、旅行中の軍隊と同宿し、兵士がアフガニスタン流の音楽で、盛に賑ふので覗いて見た所、呼び入れて上座に据へられ、暫らく聴いて居たが、目に付いたのはコンナ時でも、一切酒を用ひなかつた事である。

三十一日朝其処を起つて北行し、晚景アムーダリヤ河畔でトルメツツの対岸に出た（村あれども其名を忘る）河に近づくに従つて砂深く多少の困難があつた。河岸には卓子を据へて佐官級の將校が、幕僚と共に監視して居た。夫れは河を渡つてアフガン領に入る者無きやを監視するのである。対岸露領には恰も火の見櫓の如き物に登つて此方を監視して居る。斯く双方から監視して居るので、戦場の如き感を与える。自分が彼の將校に逢つた時、彼曰く、この村には外国人の宿泊は許さぬ事になつて居るから、今夜の内に對岸に渡つて貰ひたいと。依つて自分は此処で通訳や護兵等に別れ渡船に乗つた。アムーダリヤは此処では一哩許りに見ゆる。アフガン側半分は水が流るゝが露領側半分は干潟である。両方共岸はそう高くない、水のある所は船で渡したが、干潟になると船を捨て船頭が自分の荷を負ふて歩いた。此時日はブツツり暮れた。干潟には処々に水溜りがあるので、水溜りの処は船頭が自分を背負ふて渡して呉れた。斯くして干潟を歩いて、彼の火の見櫓の処に来ると、櫓の上から露人が降りて来た。頭には先の尖つた帽子を戴き、身に外套を着、長剣を帯びて居た。自分は當時是れがソ連の兵士だとのみ思つて居たが、今日から考へるとゲーバーウーに間違ひあるまいと思ふ。船頭は此露人と何か話し、更に自分の方を向いて、何か言ひ、荷物を其処に置いて船の方に返つた。聴く所ではアフガニスタン人は是れより露領の方に入る事は出来ぬとの事である。自分は彼の露人に大使館で貰つた書付を見せた所、櫓に上つて行つて、高い所でヤシユノシユケ・タナベと謂つたから、下からヤスノスケ・タナベと謂つた所、又下りて来て、其処に積んであつた刈り茅を取り出し、火を付けて暖にして呉れたので好意のある事が分つた。そうして半時間計り経つと、トルメツツから馬車が来た。是れは電話を掛けて呼んだのである。其馬車に自分を乗せ、荷物も積んで呉れた。是は大正十四年大晦日の晩の事で得体の知れぬソ連に入るのではあるが、自分はカーブルを立つ時、無事にモスクウに着けるとの自信があつたから、少しも不安は感じなかつた。夫れから馬車はトルメツツ市に入り、自分を警察署の様な処に連れて往つた。此処でも数人官吏が居たが、自分に椅子を与へて掛けさせたり、巻煙草を与へて火を着けて呉れたりして好意を見せた。只旅券は一時預つた。又馬車に載せて別の役所に往つた。此処では別段の事なく、又馬車に載せ市中を引廻した末、郊外の露国領事館に連れて往つて、戸を敲くと、紳士が出て来て、自分に仏語が分るかと聴くから分らぬと答

へると、門内に這入つたが、又出て来て自分を門内に入らせた。是れがソ連の領事であつた。是れが領事であるとか、此家が領事館とか云ふ事は後に分つたのである。露領に露国領事館があるとは少し異様に聴ゆるが、トルメツツはウズベクはウズベック共和国の都市で、ウズベックには自治が許してあるから、ロシア共和国と互に領事を交換して居るのである。然るに此領事館はまだ開設匆々と見へ、万事不整頓の様が見ゆる。自分には一台の寝台を當てがはれたが、其寝台は本式の寝台で無くして、粗製の仮寝台であつた。兎も角自分が夫れに寝ようとして居ると、領事が瓶の栓を抜かうとしながら遣つて来て、言葉が分らぬが、あちらで一処にウオツカを飲むから来いと云ふ風を示した。自分はその儘の衣服で随いて往くと、一室に館員が皆卓を囲んで集つて居り、領事の妻子も居た。其真中に大きな椅子を据えて、自分を掛けさせ、ウオツカを飲み始めた。それもコツプが足りないので、我が飯椀で其不足を補つた。コツプも飯椀も極めて粗末な物である。飯椀はトルキスタンで出来るのである。自分に何か話し掛けたい模様であるが、英語が分からぬので字書を持ち出して来た。そうして居る内に、一人が起つてコツプを挙げ、ヤボン・ウンド・ロシア・・・万歳とやつた。依つて自分も似寄つた事を言つて跋を合すると、皆々大歡びであつた。御馳走も粗末で器具もお粗末、話は出来ない会でも、和氣藹々たるものがあつた。其内酒が廻つて、苦しくなつて来たので、自分は席を辞して寢に就いた。此日は大正十四年大晦日だから故郷の事を思ひ駄句が浮いた。

おきさすの瀬よりもかたき年の瀬を

故郷人のいかに越ゆらん

おきさすはアム・ダリヤの別名である。

翌朝になると、又領事が遣つて来て誘ふので、随いて往くと今度は茶の会で、館員の外領事の夫人と入換へに母堂が出席した。彼れ此れして居る内に、マザリシャリフで別れたダニーロフ夫妻が、此領事館に着いたので、又一つになつてタンケンドまで同行し、色々の便宜を得た。

トルメツツは此地方のソ連鉄道の終点で、道路広潤市街も幅員は仲々大きいが、大抵一階建で兵営市街の様な感じがした。自分等はダニーロフ夫妻と共に是に乗つた。プハラに近づくくと客車があるが、トルメツツ線は三等列車丈であるから、腰掛くる所は板で、皮の覆ひ布帛の覆ひもなかつた。然るにカガン迄来ると、是処でオレンブルグから裏海〔カスピ海〕東岸の港クラスノボドスクに到るトルキスタン本線に接続するから、覆ひのある立派な客車がある。自分等が稍々意外に思つた事は、トルメツツ線とトルキスタン鉄道の本線と接続するのはプハラで無くして、プハラから何哩か隔てたカガンで、プハラにはまた鉄道は通じて居ないと聴いた事であつた。カガンでは本線に乗換ゆるので一寸下車した。此処には綿花工場があると聴いて見に往つたが、紡績工場では無くして、綿実を取去り、綿実を取去つた綿花を圧搾して荷造する工場であつた。此辺の工場は大抵この種の者らしい。トルキスタンは綿花の産地ではあるが、其綿花は欧州に送つて、紡績糸にするのは欧露であらうと推想した。

カガンで本線に乗り換へたが、是から莫斯科〔モスクワ〕迄の間、只タシケンドで下車した丈であつたから、途中で感じた事を概括して記載する。

第一、この鉄道では米国の鉄道で黒人を劣等扱ひすると異にして、ウズベック人でも、トルクメン人でも、キルギース人でも総て露人同様に扱つて居るので、ダニーロフ夫妻が自分と同席したばかりでなく、ウズベック人一人と、トルクメン人一人が同席し、自分の隣室にはキルギース人の医者一人乗り、其隣の室には少し英語の分る露国婦人が乗つて居た。そこで隣室のキルギースの医者が屢々自分の室にやつて来て、ウズベック人や、トルクメン人と親しそうに談話を交すので、自分はキルギス語で話すのか、ウズベック語で話すのか、夫れともトルクメン語で話すのか、不審を抱いて尋ねた所、其答はこつこつ風に分るに了解された。

ウズベック人もキルギース人もカラキルギース人も、將た又コウカサスのアゼルバイジャン人もゼオ ज्या人も皆土耳其人であるから、言語は皆同一である。土耳其語の通ずるのは以上の民族計りで無く、匈牙利のマジャール人露領タキシード人（是は記憶の誤でフィン人であつたかも知れぬ）にも少しは通ずる。自分は言語不通でも略ぼ右の様に了解して、是れは大切な問題だと思つたので、是れ等の土耳其人を英語の通ずる露国婦人の室に連れて行き、自分は此人等の話を右の様に了解したが、誤はあるまいかと質した所、其婦人が誤は無い、其通りだと言つた。して見ると土耳其斯坦五共和国の内タジク共和国のタジク人

のみが波斯語で、他は皆トルコ語で通ずる。しかもトルコ人の住する地方はトルキスタンは勿論東トルキスタン即ち支那の新疆もヒンドクシユ以北のアフガニスタン即ちアフガントルキスタンをコウカサスのアゼルバイジャン及ゼオジヤをも含む広大な地域を占めて居て、人口は三千万内外を有し、蒙古人の十倍に上るから、将来非常の英傑でも出でて之を統一すれば、又大帝国を起す事が有り得る事だと思つた。

第二、ヒンドクシユ山脈を越へて後は、莫斯科迄数千哩の間、一の山嶺をも越へず。アフガントルキスタンの平原は、トルキスタンの平原と連り、トルキスタンの平原はロシアの大平原と接続して居るのを見た事で、東はアルタイ山脈及葱嶺、南はヒンドクシユ山脈、西はカルパシヤン山脈の間に、世界稀有の大平原を包んで居る。夫れのみでなく、蒙古大平原と此大平原との間にも、只アルタイ山脈があるだけで、此山脈を越ゆれば、他には一個の山をも越へずして、中郎欧羅巴に侵入し得るのだから、古来蒙古やトルコの鐵騎が、屢々欧州の心臓部に突進して、白人を震駭させたのも、無理ならぬ事と思つた。

第三、トルキスタンの北半から、莫斯科迄総て雪に覆はれて居て分らなかつたが、ヒンドクシユ山脈以北トルキスタンの南半は雪に覆はれずして見る事が出来たが、汽車の中からの觀察で間違つて居るかも知れぬが、自分はこゝいふ觀察をした。トルキスタンは大体一種の砂漠であつて、サマルカンド、ブハラ、トルメツツ、タシケンド等は広大なオアシスであるから、只其周囲数哩或は数十哩が肥沃で、善く五穀を生ずるが、其外の土地は概して不毛の地であると。

第四、トルキスタンは冬瓜の如き巨大な美味なメロンが生じ廉価である。米国でもトルコでもアフガニスタンでも、メロンは有るがコンナ立派なメロンは見なかつた。恐らくは世界第一であらう。

第五、自分はタシケンドで下車した。夫は此処の銀行で、自分の信用状を示し、金を渡して貰ふ為であつた。ロシアは旅行券に記入して無かつたから、タシケンドの銀行も勿論リストに無かつた。然るに重役等が協議して言ふには、是れは正金の信用状 = だから残つた金を全部一時に引出し、この信用状 = を銀行に渡すなら、金は渡して宜しい、是れを倫敦の正金に持つて行けば、金が受け取れるからであると、そいつて金を渡して呉れた。由つて正金の信用状 = は勿論銀行へやつた。其時自分は感じた。コンナ事は日本の銀行では兎ても出来ない事だが、ロシアは流石に融通の利く国だと思つた。この銀行はタシケンドのコンマーシャル銀行であつた。是れで旅費が出来たので安心して莫斯科に立つた。

タシケンドは総督府のある所で、ズナメンスキーと云ふ総督が居たからネダニーロフ君の注意もあり、ダニーロフ君と共に、自分は夫れを尋ねた。然るに総督には英語が分らず通訳も居らず、自分はロシア語は分らず唾と唾との対面であつた。併し此総督は容貌態度一見して精悍な人物たる事が分つた。自分が此人に逢つたのは、沿道の露国官吏が、善く待遇して呉れたから、挨拶も仕たかつたが、夫れよりも當時セミパラチンスクとウエールヌイ(今のアルマータ)の間に鉄道が無い為め、日本からトルキスタン地方に往くに非常の廻り道をしなければならなかつたので、ロシアに此鉄道を敷設する意志の有無を問はんとしたのであつたが、総督は自分の問に答へて、其鉄道は政府で敷く事になつて居ると言つたが、帰朝の翌年であつたと思ふ、既に此鉄道即ち今のトルコシベ鉄道が開通したとの新聞を見て、ソ連政府も事に依つてはコシベ鉄道が開通したとの新聞を見て、ソ連政府も事に依つては驚く程敏感な事をやると感じた。ズナメンスキーは又こゝいふ事を言つた。日本、支那、アフガニスタン、ペルシヤ、トルコ、ロシア、是は皆アジアですから仲善くせねばなりませぬ。英、仏、独、米、意是れは違ひます。莫斯科に着いて之を大使館で話すと、夫れは今のソ連の方針ですと言つて教へられた。唾の問答によくこんな事が判つた者だ、自分は唾と唾との間で、どうしてコンナ問答をしたかもう忘れて仕舞つた。総督と分るゝ時、莫斯科に行かるゝなら、サボイホテルに電報を打つて、停車場に迎へにやりますと言つて、自動車で停車場迄送らせて呉れた。

タシケンドでは一泊せずして汽車に乗つたが、ダニーロフ君は少し此処に用があるから、再び莫斯科で逢はう。極東極で尋ねて呉れば、自分の居所は分ると謂つて又別れ、自分は単身で莫斯科に行つた。莫斯科停車場に着いても、サボイホテルから誰れも迎へに来て居ないので櫛を雇つてホテルに往つた所、幸に部屋が有つたので、一晩このホテルに泊つた。翌日此ホテルに日本人が居ると聴いて遣つて見ると、大使館参事官 氏であつたから、刺を通ずると、氏は言ふ。大使館にロシアの外務省から電話が来てアフガニスタンから田鍋と云ふ人が来ると、タシケンドから通知が来たが、ソナ人が来るかと尋ね

て来たが、アナタから電報も何も無いので、日本人は来ないと言つてやりましたと言はれたので、サボイホテル迎に来なかつた理由が分つた。夫れより参事官と共に大使館に赴き、大使に会つて、大使館の一室を貸して貰ふ様頼んだ所、快諾して西書記官の居らるゝ棟の一室を貸して呉れたので、十二日間モスコウに滞在し、西氏始め大使館諸子の歓待を受け、大使よりは旅費の世話迄して貰ひ帰途に就いた。

莫斯科を少し離るゝと忽ち森林に入り、ウラル山の東迄幾百里となく夫れが続いて居たが、此森林に雪が積り、夫れが日光に照らされて、枝に凍り付き、宛然たる花林であつたので、

しればこそ雪とも見つけ幾千里
行けどもつきぬ花のはやしを

莫斯科にて極東局に往き、ダニーロフ君を尋ねたが、どうしても分らぬ。されば中東局なるべしとて、二十一二歳の若き婦人が中東局に赴き探して呉れたが、此処でも分らず、とうとう逢ふ事が出来なかつた。此婦人に逢つて、極東局長に会い挨拶をしようとしたら、局長は大臣の処に往つたと言ふから、夫れなら局長で無く書記官で善いから、お目に掛りたいと言つたら、私が書記官ですと謂つたので驚いた。又此婦人は陸軍大学を卒業した人だと聴いて更に驚いた。

ダニーロフ君はタシケンドで分るゝ時、自分の居所は極東局で聴けば分ると謂つたのに、何故極東局で聴いても分らぬ計りで無く、そんな人は居ないと言ふのは何故か。自分は不審を抱いた。併し君の事計りで無い。自分の露国入りは大使館で寧ろ勤めた方であり、沿道のロシア領事も歓待したのであるのに、不思議な事には、其後の模様を聴けば、ヒンドクシユを越へて日本人が露領からカーブルに往来する事はソ連で許さぬそである。現に自分がアフガニスタンから莫斯科に来たのを見て、莫斯科の大使館付海軍武官某氏(名を忘る)がヒンドクシユを越へ、アフガニスタンに往かうとしたら、ロシア政府で許さなかつたとの事である。自分丈は許して置いて、何故そんな事をするか、自分には何共理解に苦しむものである。

併し是をダニーロフ君の事と共に、併せて考へると、或はこういふ事情であつたのではあるまいか。アフガニスタンに日本人が来ると云ふ事は殆ど無いのに(自分より何年か前に印度駐在武官谷氏があるのみと聴く)田鍋と云ふ者がやつて来て、二ヶ月も滞在し、アミールにも謁見すると聴いたので、何の為に来たのであるか。夫れを探らん為めに、ゼネラル・リンクをして訪問させ、夫れだけでは分らぬので、ロシア行を勧め、ダニーロフ夫妻を帰国と称して同行させ、実情を探らんとしたのではあるまいか。そう思へばダニーロフがタシケンドで消へたのも理由が分る。最初は自分を政府の命を帯びて来たのだと想像したであらうが、途中で旅費の乏しいのを見た計りで無く、タシケンドでは正金銀行の信用状を、コンマーシャル銀行に渡したので、自分の旅費の和菓が僅少な事がハツキリ分つたので、政府の命を帯びた者で無いと判断し只一個私的旅行者に過ぎぬと思つたから、タシケンドからカーブルに引返した者ではあるまいか。夫れだけ信用状に記入し、夫れで米国やカナダを十ヶ月計り旅行し(最も其内五ヶ月満四ヶ月はシャートル、ワシントン大学にて英語練習)倫敦にて更に二千五百円日本よりの送金を受け取つたが、信用状に記入せるは只夫れだけであるから、私的旅行者とより外は見えず、何等重要関係を持たぬ者と思つたであらう。事実此時自分はアマヌラハン陛下の話された事を英語に訳した書面を持つて居たのであるが、そんな者を持つて居ようとは夢にも思はなかつたであらう。ダニーロフと云ふ名も或は偽名かも知れぬ。

莫斯科からハル賓の間は、探偵が随いて居たが、特にチタでは汽車の延着から、二三日待たねばならなかつたので、一二ヶ所ホテルを換へた処、驚く程嚴重な探偵が随いた。ホテルでは直ぐ隣の室に探偵が居て監視し、活動に行けば活動に随いて来て、色々の試みを為し自分を試した。

エカテリブルグで、或る朝汽車が停まつた時、駅に食事に往つた所、一団の労働者らしい者が居て、何に激したのか、自分の手を取つてコツチに來いと謂つて、何処かに連れて行かふとしたが、莫斯科から同車した浦潮のロシア人が傍に居て、仲裁して呉れたので、手を離れた。此地は皇帝を虐殺した処で、人氣が悪い様に感じられた。此浦潮露人の名を忘れたのは遺憾千万である。非常な親切な人であつた。

自分は莫斯科市中を歩くにも汽車の中でも、普通の洋服でなくして、アミールから賜はつた駱駝の毛皮のアフガニスタン流外套と、同じアフガニスタン流上衣を着ていたから、嘸異様に見へたであらう。問題を起すのも、一つは是が為であつたであらう。チタで汽車を待つて居る時、露人の男女が自分を遠くから見て、何か評して居る模様であつたが、やがて傍にやつて来て、貴君はブリアードの僧侶(シヤーマン教ならん)でしょうねえと言つた。

自分は帰朝して持帰つたアマヌラハン陛下の書面を、外務大臣幣原氏に提出し、謁見の顛末を話し、尚ほこの書面を天覧に供し奉らん事を請ふた。アマヌラハンの熱望は御自分の意思を、我天皇陛下に通じ奉るに在る事は明瞭なりしを以て時の侍従長珍田氏にも書面の写しを提出して、天覧に供し奉らん事を請ふたが、尚ほ夫れでも安んぜず、故久邇宮殿下の御信任あらせらるる牧野伯に頼み、故久邇宮殿下の内謁を願ひ、其御許を得て、赤倉の御別荘にて拝謁を遂げ、同じ書面の写しを捧呈し、天覧に供し賜はらん事を願ひ奉りしに、御承諾遊ばれしに依り始めて安心せり。

當時既に日本とアフガニスタンとの間、修好条約締結の談判は開始せられしも、条約の締結を見、公使を交換せしは其後の事なり。然れども自分は右の書面が、両国の国交開始に如何なる用を為せしや。更に知らざる所なり。